

# 世俗化に直面する寺院の存続

帰元寺と古徳寺を事例に

北海道大学文学研究科 熊晋

## 1. 目的

1979年宗教復興以来、中国政府は強制的な宗教政策を打ち出し、宗教を政治の補助手段にするため努力している。一方、解禁された宗教は需要関係により商品化される傾向も見られる。この状況に面し、宗教信仰の純粋さはどれほど保持できるか。本研究は中国宗教独特な「世俗化」を明らかにする。

## 2. 方法

中国中部の中心都市武漢市にある帰元寺と古徳寺を事例に、参与調査・面接調査を行う。寺院活動（日常、節日、社会交流活動、政府部門との共同作業など）を考察する上、先行研究を踏まえ、政府の宗教政策、寺院の調整、信者の選択及びその意識形態を分析する。

## 3. 考察

古代帝国は儒家思想を正統に、宗教のサンクション機能と合わせて利用し、超自然要素を低めることにより、大衆を統合し、伝統行事を最大限に合理化させる。一方、民間は超自然力に非常な情熱を呈示し、それを基礎に信仰・崇拝を行う。

現代共産党政府は高度強制的な宗教政策を実行した結果、従来分散的な宗教資源が組織化・制度化されている。伝統信仰は無神論を前提に、「政治擁護」への変形を余儀なくされた。宗教管制による宗教の神聖性が減少する一方、政府指導による合理性が増加しつつある。宗教は政府従属の形で政治力の一部として働いている同時に、信者の選択範囲も非常に限定された。

故に、中国宗教の世俗性の判断基準は、政府干渉に面し、宗教信仰の純粋さがどれほど保持できるかである。政府・宗教・三者間の関係を以下の図式で説明する。



政府のマクロコントロール及び信者の要求に面し、寺院側の対策を以下のようにまとめる：「凝集力：民間信仰との重複部分を活用」と「現世性：Believing Through Possessing」。

「凝集力：民間信仰との重複部分を活用」とは、①異なる神話体系の神々の相互援助。伝統節日に、仏道及び民間宗教の中に好評されている神々の彫像を寺院に置くことで、より多い信者を集める。異なる宗教に所属しても、共同感情が共同崇拝により凝集され、兼容な信仰フォームも構築できる。②巫術成分。伝統信仰習慣に応じ、民衆の「超自然要素依存」に応え、供養、占い、魔除け、魂鎮めなど巫術性質を持つサービスを提供する。超自然性を付与することにより、信仰が新たなレベルに辿りつく。

「現世性：Believing Through Possessing」とは、宗教財を公開、願望の具体内容を強調、私欲を宣伝することで、宗教資源を専属化させる。擬似契約関係を築き、本来宗教心の表現である信仰は、現在の商品所有と同じ性質を持つようになる。この方法は、それほど禁欲でない「part-time 信者」に効率的な宗教財を提供、より多い人々の宗教要求を満足する。

## 4. 結論

本研究は、中国宗教の「世俗化」が、政府干渉によるものということを明らかにした。その上、現代中国政府・宗教・信者三者間における受容・需要関係を提出、寺院が世俗化に面する時の対策（凝集力を築き、現世性を高める）を明らかにした。

文献

楊慶堃著、范丽珠訳（2007）、《中国社会中的宗教》、上海人民出版社

Fenggang Yang (2012), Religion in China, Oxford University Press